

本校ボクシング部・本県専門部の取り組み

～ 部員数日本一の秘訣 ～

岩手県立水沢工業高等学校

佐々木 貴 弘

1. はじめに

少子化が進む中、あらゆる競技において競技人口の確保が課題となっています。ボクシングも同じ状況で、ここ10年弱で登録者数が2／3に減ったと聞きました。

そこで、近年、本県ボクシング専門部も普及には力を入れており、おかげさまで2018年度のボクシング高校生登録者数は男女とも全国1位（加盟12校）となりました（表-1）。本県は部活動全員加盟が原則であったこと、入部者は全員すぐ登録をするため、その後退部してしまったりして試合に出たこともない生徒も含まれていることを考えると額面通りに受け取れない部分もありますが、それでもボクシング競技者激減傾向にある近年において、人口比を考えると健闘している方ではないではないでしょうか。本校に限ってみても、2019年度、男女合計の部員数が全国加盟325校の中で一番になりました（表-2）。特に女子部員が多いのが本校の特徴で、ここ数年の女子部員数は常に全国有数となっています。ちなみに本校の部活数は運動部13、文化部5、生徒数は442名（うち女子82名、2019年度）で、県内でも決して大規模校の部類には入りません。

本稿は、部員確保を図りつつ、普及と強化を目標に、本校および本県専門部で取り組んでいることを事例として紹介します。

2. アマチュアボクシングの紹介

アマチュアボクシング（アマ）は、プロボクシング（プロ）と違いメディアに出る機会も少なく一般に馴染みがありません。プロとの違いを簡単に述べますと、アマはグローブが大きく、ラウンド数も少なくなっています（アマ3R、プロ4～12R）。プロは上半身裸ですが、アマはランニングシャツを着用し、高校生以下と女子はヘッドギアを着用します。決定的に違うのは、アマは、力の差があるときやダメージが感じられるときはすぐにストップをかけ、8カウントで休ませたりし、試合を終了させたりします。プロはほぼ倒れるまで試合



写真-1 胆江日日新聞より¹⁾

表-1 岩手県高校選手登録者数²⁾

	男子	女子	計	備考(人口)
人数	117人	41人	158人	約125万人
全国順位	1位	1位	1位	32位

表-2 ボクシング部員数全国上位校³⁾

順位	学校名	男	女	計	備考：全校生徒数(うち女子数)
1	水沢工業(岩手)	25	17	42	442(82)：2019年度
2	興国(大阪)	40	0	40	2,220(0)：2018年度
3	日大山形(山形)	30	7	37	1,271(413)：2013年度
4	東福岡(福岡)	33	0	33	2,699(0)：2017年度
5	九州学院(熊本)	24	7	31	1,040(487)：2019年度

を続行させることが多いのですが、アマはその前にスタンディングダウンを多く取りますので、完全に倒れてしまうようなダウンになることは稀です。1日1試合までと決まっており、毎朝健診計量を通じた選手のみ試合出場が許可されます。また、競技を始めるにあたってMRI検査が義務づけられるなど、厳格な健康管理の下競技が行われています。そのこともあってか、スポーツ安全保険種目別事故発生割合はそれほど高くはなく、イメージほど怪我が多いわけではありません。

競技としての歴史は古く、オリンピックでは、1904年セントルイスオリンピックから実施されています。2012年ロンドン大会より女子も実施されるようになりました。オリンピックに合わせ、国内でも女子ボクシングが盛んになってきていますが、インターハイでは男子（個人戦8階級）のみの実施で、女子はありません。国体は成年女子の1階級のみで、高校生女子の全国大会は、全国高校選抜大会と全日本女子選手権（ジュニアの部）のみとなっています。

ボクシングは、小体連や中体連、スポ少活動がほとんどないため UJ（アンダージュニア：小中学生ボクシング）選手が少なく、地方では多くの選手が高校から競技を開始します。民間のボクシングジムが多く、小さい頃からプロ選手に混じり練習をしている都市部の選手とのレベル差は大きく、その傾向は年々拡大してきています。

3. 普及と強化のバランス

メジャー競技の場合、小学校あるいはそれ以前から選手の育成は始まっています。一方、ボクシングの場合はそうはいかず、特に地方においては、高校から競技を開始する例がほとんどです。そうすると、本当にボクシングの競技特性を分かった上で入部する生徒はごく少数です。何しろやったことがない上に、見たこともほとんどないので（プロはさておき、アマの試合が地上波で流れることはほとんどありません）、「やりたいやつだけ来い、厳しいけど耐えられるなら来い」と構えていては部員が減る一方です。しかも、高校スタートの選手を UJ 選手と共に育てるのは容易ではありません。歩んできたステップが違うからです。UJ 選手はボクシングの面白さに触れ、競技としての入り口に立ち、より高みを目指すアスリートとして高校ボクシングに挑んでいます。対して高校スタートの選手は、UJ 選手が小中学校で歩んできたステップを高校の3年間で一気に踏まなければなりません。メジャー競技であれば小中学校の活動を経て高校での挑戦へと至りますが、マイナー競技においては、高校スタートの選手にそのプロセスを高校3年間（実際は2年とちょっと）で経験させなければいけません。つまり、普及と強化を同時進行させなければいけない、そこに難しさがあります。経験者を優先した練習にすれば初心者がいないがしろになり、初心者を優先させた練習にすれば強化が進まず、そのバランスをどうとるか、マイナー競技の高校指導者が抱える悩みではないでしょうか。

4. 本校ボクシング部・本県専門部の取り組み

本校ボクシング部は、かつてインターハイ学校対抗を2度制覇した古豪ですが、その後、専門の顧問がいなくなっからは部員も減少し、一時は廃部寸前にまでなりました。しかし、当時の顧問の先生方のご尽力や、外部コーチとして迎えた佐藤甚氏（後述）のお力添えもあり、再び活動が活発になってきたという経緯があります。私が赴任した2007年（平成19年）は、古豪復活の道を歩み始めたそんな時期で、翌年から岩手県特別スポーツ強化指定

表-3 本校ボクシング部員（選手）数の推移（H19～）

（ ）はUJ [=小中学ボクシング] 出身選手の内数

年度	男子				女子				総計	全国大会入賞者数	
	1年	2年	3年	計	1年	2年	3年	計		男子	女子
H19	13	3	5	21	6	0	0	6	27		
H20	22	13	3	38	3	5	0	8	46		2
H21	5(1)	10	10	25	2	2	5	9	34(1)		1
H22	12	3(1)	10	25	5	2	2	9	34(1)	1	
H23	12	10	3(1)	25	2	6	2	10	35(1)	2	4
H24	19	7	7	33	6	0	6	12	45		1
H25	9	13	6	28	1	6	0	7	35		1
H26	9	6	8	23	4(1)	1	6	11	34(1)	1	1
H27	14(1)	8	4	26	3	4(1)	1	8	34(2)		
H28	7(1)	9(1)	8	24	0	3	3(1)	6	30(3)	1	3
H29	6(1)	6(1)	8(1)	20	5	0	3	8	28(3)	3	1
H30	12	7(1)	6(1)	25	13	4	0	17	42(2)	2	2
R1	15	5	6(1)	26	3(1)	10	4	17	43(2)	2	3

校に指定されています。（参考：H19以降の本校部員数の推移＝表-3）

さて、本校ボクシング部および本県専門部の取り組みについて紹介させていただきます。

私は、部顧問の仕事の大きな一つは「環境づくり」だと思っています。部顧問には、競技を指導する「コーチ」としての役割も求められますが、実はその役割は一部に過ぎず、文書処理や会計などの「総務」的役割だったり、生徒の心に寄り添う「カウンセラー」だったり、多岐に及ぶでしょう。中でも重要なのは、チームをどう運営（マネジメント）していくか、「経営者」としての力が重要だと思っています。その方法論としての「環境づくり」です。本校・本県専門部が、部員の確保と強化のために行った環境づくりは以下のとおりです。

（１）入部しやすい環境（雰囲気）づくり

気軽に入部してはいけないような敷居の高さ、そして一度入部したら絶対辞められない、そんな閉鎖的な雰囲気は入部を躊躇させます。そんな空気を纏わないよう、気さくな雰囲気、オープンな雰囲気づくりを心掛けました。顧問の生徒との接し方が、そのまま生徒間の関係やチームの雰囲気に繋がってきています。

（２）人間形成の環境づくり

選手として成長するには人間力の向上が欠かせません。そのために私が意識しているのは、集団の中に入れること、集団で生活させることです。それが宿泊を伴うものであったり、全く知らない人の中であったり、ましてや世代が違う人の中であれば効果は抜群です。人は集団の中で成長する。そう考え、意図してそのような環境に生徒を置くようにしています。様々な事情があって集団生活を嫌う生徒もいますので、そこは強要をしないようにしながらも、大会前や長期休業中など、要所での合宿は欠かせません。

（３）指導面の環境づくり

部内には、全国大会入賞者から初心者まで、さまざまなレベルの選手が男女ともにいます。とても一人では抱えきれない状況ではありません。既述の通り、部顧問に求められる役割も多種多様です。顧問それぞれ得意分野もありますので、より多くの方々に関わってもらえるようにするためにも、自分が絶対的な存在とし君臨するような状況は作らないようにしています。その分、生徒は多くの大人と接することになり、人間的成長も促されます。ただし、技術的な面や方針的な面で多くの指導に触れることになるため混乱が生じる可能性があります。その点のフォローには、一つの形、一つの考え方を押しつけることのないようにしながら、気を遣っています。特に技術面ではポイントを絞り教えるよう注意しています。

（４）競技力向上のための環境づくり（ジュニア層の育成と専門部との協力）

本校のアカデミー的組織として、競技力向上と安定した部員の確保を目的に設立したジュニアチーム「奥州 WBC」があります（表-4 参照）。奥州 WBC は、全国で6 番目となるボクシングのスポーツ少年団として立ち上げました。近年では、このチーム出身の生徒も入部するようになってきました。数多くいる部員の中には、奥州 WBC 出身のスキルを持っている部員や、才能に恵まれ、あるいはたゆまぬ努力をし、県代表選手になった部員も存在します。そうすると、普段の練習環境では物足りなく、より高いレベルでの練習、高いレベルとの練習試合が必要になってきます。これは県内各校とも同じ状況で、したがって、本県専門部（あるいは県連盟）では、県代表選手クラスを集めた県選抜チームの活動を多くしています。東北大会、全国大会前には必ず代表選手で合宿をする他、関東大学リーグを見学し大学の練習に参加させてもらったり、ナショナルチームの監督やトレーナーを呼んで指導を受けたりと、他県と比べ、県選抜チームで活動する機会が多いのも本県の特徴です。それにより、実力のある者同士、上位入賞を狙う者同士、普段の部活動よりも高い意識を持って活動する場を設けるようにしています。

なお、本校ボクシング部（男子）が強化指定校に指定されてからの13年間の全国大会入賞者数は男子12名、女子19名を数えます（表-3）。本県の強化指定校の延長基準が「インターハイか国体における入賞数が12年間で4 回以上」となっていることを考えると、一定の競技

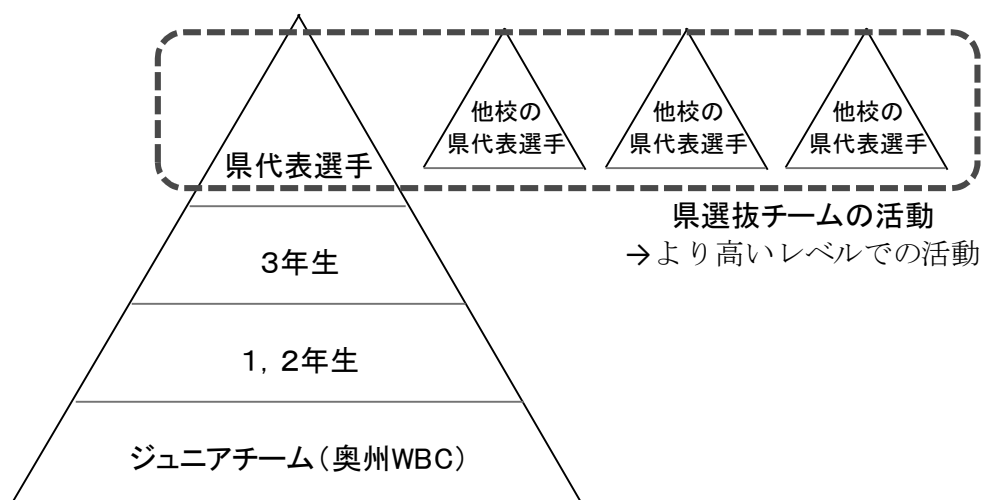
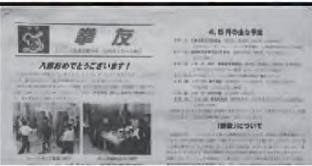


図-1 本校ボクシング部の階層構造と県選抜チームの構成イメージ

成績を取められているのではないかと考えています。その他、具体的な取り組み例の一覧を表-4にまとめました。

表-4 具体的な取り組み例

1. 「場」を設ける 儀礼的な「場」、イベント的な「場」を意識して設けるようにしています。それが部のけじめづくり、雰囲気づくり、コミュニケーションづくりやモチベーション向上に繋がっていきます。例えば、新入部員歓迎焼き肉会(4月)、3年生引退スパー会(10月頃)、お別れの会(3月)などで、かつては文化祭で3年生対1,2年生の公開スパーリングを実施していたときもありました。	
2. 部報の発行 女子部員が多くなったのに伴い、2018年度から始めました。女子生徒は家庭で結構部活の話をする。その時の会話のネタになればと思い、2018年度は17回、2019年度は16回発行しました。校内のあらゆる通信ものより多いのが自慢です。	
3. 記録写真の撮影 大会や合宿、要所の行事では意識して写真を撮るようにしています。部報はもちろん、校内新聞や生徒会誌などにも活用できますし、時には地元紙へ提供し取り上げてもらったりしています。そして、卒業時には撮り溜めた写真をUSBに保存し、プレゼントします。その数約6,000枚。10年後、20年後には宝物になってくれるものと信じています。	
4. マスコミの活用 胆江日日新聞は、奥州市周辺のローカル紙なのですが、ママに話題や試合結果、写真を提供することで、結構記事として取り上げてくれます。購読率も高いことから、地元へのいいアピールに繋がっています。最近では、「木工といえば女子ボクシング」のイメージがすっかり定着してしまいました。男子の強化指定校なのですが…。	
5. アカデミー組織(ジュニアチーム)の創設 強化を考えると、UJ選手の育成は欠かせません。元々奥州市(旧水沢市)には市で行っているボクシング教室があったのですが、これをスポーツ少年団「奥州WBC」としてチーム化してもらい、本校のボクシング場で練習してもらうようにしました(現在ではスポ少登録はしていませんが、当時はボクシングのスポ少としては全国6番目のことでした)。イメージはJリーグです。Jチームは必ずアカデミー組織(ユースチーム)を持つことが義務づけられており、それが継続的な強化に繋がっています。本校も、近年ようやく奥州WBCで育ったUJ選手が継続的に入部してくるようになり、安定した成績を残せるようになってきました。	
6. 合同練習会の開催 全国では盛んに行われている大規模な合同練習会が、東北地方にはあまりありません。そこで、他校・他県との交流の場を設けたく、本校でも2007年(平成19年)から「及川武史杯交流大会」を開催しています。第13回を迎えた今年は、5都県から15チーム、約100名の選手が集まってくれました。この練習会の目玉は、大学リーグで行われている団体戦で、チーム意識の醸成にも繋がっています。舞台設定をしっかりと選手のマチベーションが上がり達成感が生まれます。開会式や選手宣誓も行い、団体戦前の挨拶も揃いのユニフォームを着てしっかり行う。あえて形式的にすることで厳かな雰囲気をつくり出し、やりたい、やって良かった、という思いが生まれるようにしています。	
7. タレント発掘事業や普及事業への協力 運動能力の高い小学生や中学生を対象としたタレント発掘事業(いわゆるスーパーキッズ事業)の種目体験(ボクシング体験)や、市や総合スポーツクラブ主催のボクシング体験教室には部員を連れて積極的に参加するようにしています。このとき、特に女子部員たちは、小中学生に素晴らしい指導をしてくれ、本校部員にとっても楽しみながら貴重な経験を積ませていただいています。	
8. 女子だけの練習会や対抗戦の実施(女子部員を増やすために) 男子が混じると多くの女子は遠慮します。ボクシングをやってみようという思いを持って入部した女子生徒でも、励まし合ったり共感合ったりする仲間がいないと、その思いも萎んでがちです。そのため、女子のみの練習会や合宿・遠征などを意図的に設けるようにしています。女子ボクシングに取り組んでいる者同士、仲間意識、連帯感を醸成するため、県女子選抜チームを編成し、他県との団体対抗戦を行っています。群馬県女子選抜とは過去4回対戦(2勝2敗)しています。2019年度はそれに愛媛県女子選抜も加え、三県女子対抗戦として行う予定でした(コロナ騒動により中止)。賛同する指導者同士協力していくことにより、どんどん輪が広がっていくことを実感しています。	
9. 各クラスを回っての部の宣伝 顧問2人で、全クラス(4クラス)に宣伝して回ったこともあります。HRの時間を他の教員からもらって回り、私ともう1人の顧問でそれぞれ1時間ずつ計2時間、話し倒しました。他にもプロモーション映像を作成し見せて回ったり、チラシを全員に配布したりもしましたが、後で入部してきた1年生に話を聞くと、そういった我々の仕掛けよりも生徒同士の勧誘や部紹介・部見学の際の先輩の優しさ・格好良さが一番の入部のきっかけになっていたようです。	

5. 指導モットー

部活（運動部）とは何でしょうか。教育活動の一環というのはその通りなのですが、どうも捉え方が同じ教員間でも異なっているように感じます。捉え方の大きな2つは、「体育」の延長としての活動と、「スポーツ」の延長としての活動、です。

体育とスポーツの違いについて、2018年、日本スポーツ協会が日本体育協会から名称変更する際にも話題になりました。体育は心身の鍛錬を目的にしている（軍事教練に端を発するともいわれています）のに対し、スポーツは自発的に運動を楽しみ、豊かな人生を送るための手段、とされています。

さて、教育の一環としての部活動はどちらであるべきなのでしょう。どちらも教育的といえは教育的です。求められる役割は各校の置かれている事情によって異なるものですし、二極で論じるものではないかもしれません。ちなみに、本校はどちらかといえば後者をモットーとしています。よって、ボクシングの厳しさを教える前に楽しさを味わってほしい、練習の苦しさを味わう以上に彩りある高校生活を送ってほしい、と思っています。最終的には「ボクシングをやって良かった」という想いを持って卒業していってもらうことが目標です。もし、「ボクシングなんかもう懲り懲りだ」と思わせるようであれば、たとえ全国制覇を成し遂げようと、これより悲しいことはありません。

勝利より大切なものがある。一方、勝利を目指す過程でしか得られないものもある。そのことを承知しながら、指導モットーの柱を次のようにしています。

- ① 環境づくりを意識
- ② 目は掛けるけど手は掛けない
- ③ 追い込まない。腹八分目で
- ④ 自分が主役でなくていい

「環境づくり」については既述しました。練習場や道具などハード面の環境づくりもそうですが、目指すべき人間像や大会の目標などを考えさせたり、モチベーションが下がっているときに遠征や合宿を入れてみたり、練習メニューを変えてみたり、イベントを入れてみたり、選手が部活動に取り組む気持ちになるための様々な仕掛けも含めての「環境づくり」です。目標を与え、活躍の場を与え、ハードルを与え、それを見守る。中には乗り越えられない生徒もいます。だからといって見捨てることはせず、部を休ませたり、間をおいて声を掛けてみたりします。「目は掛けるけど手は掛けない」です。

練習の負荷は自分で掛けさせます。試合前になれば当然練習量も多くなりますし、生徒の力や性格に応じて試練も与えていきます。ただ、限界を越えるか越えないかの練習をやるかどうかは、自分次第です。指導者がやらせることでやりきれないかもしれません。でも、その反動もどこかくるものです。練習は腹八分目、残りは自分で挑む領域と考えています。当然、より高みを目指すには腹11分目、12分目の練習が必要になってきます。その素晴らしさ、崇高さは説くようにしていますが、最終的には本人次第、生徒に響かなければ自分の力不足、と反省します。

目を配り、気を遣っても辞めていく生徒は出てきます。もっと配慮しておけば、こんな声掛けをしておけば等々、指導者は常に反省・勉強だと実感します。強烈なリーダーシップで引っ張っていく方法もあるでしょうが、それは人それぞれで、やはり自分に合った指導法でないとながて息切れをし、苦しくなってきます。自然体で長続きする方法を自分で見つけ出

していくのが一番いいと思います。

数年前よりOBでもある千田純先生（H20卒）が本校に赴任し、部の指導にあたってくれています。同じくOBの佐藤甚氏（S57年度 IH王者）は部活動指導員として、千葉秀一氏（H10卒）は既述のジュニアチーム「奥州 WBC」監督として指導にあたってくれています。「立場が人を育てる」とはその通りで、今では監督を任せている千田純先生は、私などよりも素晴らしい求心力を持ってチームをまとめてくれています。チームの成長を考えたとき、必ずしも自分が主役である必要はなく、チームにとってのベストな体制はどうか、常に考えていくようにしています。

6. おわりに

「普通の百姓は作物を作る。悪い百姓は雑草を作る。そして良い百姓は土を作る」とは、ある農家の方の言葉です。土とは「良い作物が育つ良い環境」です。次の世代にも良い作物ができるように「良い土を作る」「良い環境づくり」の視点も必要だということ、これは部活動にもいえることでしょう。じっくり腰を据え、何のための、誰のための部活動なのか、そのためにはどのようなアプローチが必要なのか、考えていく必要があります。

近年の本校ボクシング部の特徴として、途中入部の生徒が多くなっていることが挙げられます。同級生から「ボクシング部面白いよ」と誘いを受けて入部する例が多いようです。部を宣伝する方法は様々ありますが、生徒同士の評判がそのまま部の魅力につながっていることが大きいように感じます。したがって、今いる部員の満足度をいかに上げるか、ということが、結局一番大切なのではないのでしょうか。

ボクシングスタイルがいろいろあるように指導のスタイルも様々、自分の個性を生かした方法、自分が続けられる方法がいいでしょう。その指導スタイルに合う生徒と合わない生徒もいますので、多くの方が指導に関わってくれるようにしたいものです。

本報告は、あくまで本校および本県専門部の取り組み事例です。それぞれにあったやり方があると思いますし、それぞれ状況も違うでしょう。もっといいアイデアだってあるでしょう。多くの方の知恵を振り絞り、情熱を注ぎ、部活動の活性化に繋げていけたらと願っています。

引用文献

- 1) 胆江日日新聞、2020年1月1日号
- 2) 一般社団法人日本ボクシング連盟臨時総会資料、2019年
- 3) 全国高等学校体育連盟ボクシング専門部機関誌 辛夷、2019年